

『早稲田大学図書館紀要』五〇号を記念して——歴代館長より

誇るべき『図書館紀要』

野 口 洋 二

『早稲田大学図書館紀要』が今春三月には五〇号になるといふ。第一号が発行されたのは一九五九年のことであるから、この紀要は四三年間続いたことになる。もともと、この四三年間というのは、近く百五年目を迎える図書館の歴史を考えれば、それほど取り立てていふほどのことではないかもしれない。だが、二〇号も続かずにつぶれた雑誌はいくらでもある。だから、この紀要が五〇号も続いたということは、それはそれなりに大したものである。大いに記念されてよいであろう。

この紀要の発刊を決意されたのは、第六代図書館長、大野實雄先生であった。先生は、「図書館は大学の心臓である」との信念を抱かれ、大学の心臓である図書館の機能を全うするには、「好意ある奉仕を惜しまぬこと」と並んで、「図書、資料および図書館に関する研究に打ちこむこと」が必要であると考えられて、その成果を公開するためにこの雑誌を発刊することを思いつかれたという。以来、この紀要には、図書館における半世紀にわたる研究成果が蓄積されている。だから、先生のお考えは見事に実現したと言つてよい。しかも、初めは二百頁にも満たなかつたものが、今や三百頁からなる堂々たる雑誌に成長した。最近の写真も豊富に入り、装丁もなかなか立派である。そもそも、こうした研究誌を発行している大学図書館は、日本広しといえどもそうないのではなからうか。だから、このような冊子をもっていることをわれわれは大いに誇りにしてよいであろう。

私は図書館長時代に毎号巻頭言のようなものを書かせてもらっただけであるが、何よりも嬉しいことは、近年の諸

号の充実ぶりである。以前からこの紀要の特色の一つであった館蔵図書資料の翻刻に加えて、毎号新収資料の紹介、さまざまなテーマのもとでの書誌や解題、書目、さらには図書館界の最近の動向にも触れた記録などまで、豊富に掲載されている。書き手も図書館員や常連の教員のみにとどまらず、図書館資料をよく利用している若手の研究者にまでひろがりを見せており、それぞれのレベルもかなり高い。自画自賛になるかもしれないが、この雑誌は近年の早稲田大学図書館の成長ぶりを鮮やかに示す記録であると同時に、大学図書館としてはアジアを誇るわが図書館にふさわしい輝かしい成果だと言えよう。近年、大学のランク付けがさまざまなところで行われているが、早稲田大学図書館の評価はつねに高い。機能面においても、資料面においても、図書館が早稲田大学の評価向上に一役も二役も買っていることは、図書館内外の誰しもが認めるところである。本紀要四〇号で奥島前総長も言っておられるように、「図書館とは大学そのものであり、学問そのものである」のであって、大野先生をはじめ、初代図書館長市島春城先生以来の多くの先輩が、充実に心を砕いてこられたこの図書館を、私たちはますます発展充実させて行くべき使命を負っている。その一つの要素として、本『図書館紀要』の果たすべき役割も大きい。

ともあれ、『図書館紀要』は五〇号という一里塚をこえることができた。これまでの貴重な積み重ねを踏まえて、この紀要が一層充実したものになることを期待している。大野先生も言われたように、かつて旧図書館の壁をおおっていた蔦のように、この紀要が縦横に枝を延ばし、ますます健やかに成長するよう心から願って、五〇号の記念としたい。

(のぐち ようじ 第一四代図書館長)

## 挑戦する図書館

岡 沢 憲 芙

パートナーの専門が図書館・情報学で、私の専門が比較政治学であるため、旅行をすれば、必ずその町・その都

市・その国の議会と図書館は訪れることにしている。『世界の議会』『世界の図書館』というタイトルの本なら、エンドレスに書けそうな気がする。

いま思い出すと、図書館長になる前は、「都市生活と図書館」という視点で都市計画論的な観察態度が濃厚であったが、図書館長に就任すると、「ユーザーの情報要求と利便性」という分析枠で、比較検討することが多くなった。そんな気がする。

ロンドンやパリ、コペンハーゲンやレイキヤビックなどの壮大で華麗な新・ナショナル・ライブラリーは確かに魅力的。ブダペストやプラハ、コインブラやアテネにある既に観光名所ともいえる名図書館の格式も見事。だが、スウェーデン最北部の都市・キルナやストックホルムのガムラストンにある超・小型地域図書館の「利用者最優先主義」精神の颯爽としたさりげなさはさらに印象的。参考にもなった。さすが、一九〇一年にノーベル賞をスタートさせた国である、科学・技術に対するグローバルな情報感性は鋭敏である。さしたる天然資源もない国で、いや、だからこそ突破口を求めて、盛大に展開された国民図書館運動の伝統がそれを支えてきた。そんな気がした。

無造作に・無思慮に大量生産される情報。その一方で、情報洪水と情報飢餓が共存している。遠い国なのに瑣末な情報までもが爆発的に流入してくる国もあれば、近くなのに基本情報すら入手できない国もある。この種の情報格差・情報まだら模様状況は近い将来に解消される見込みはない。図書館に出来ることはとりあえず、広角度情報ネットワークと多言語センサーの準備・構築だけである。

《地球社会をにらみ、地域社会で愛される》図書館。早稲田大学図書館にはこれまでも今も、そして、これからもなお、学術研究の萌芽培養器として時代に挑戦する果敢な実験精神が求められる。

(おがざわ のりお 第一五代図書館長)

## 「開かれた図書館」をめざして

浦川 道太郎

大学図書館長の理想像を考えると、脳裏に浮かぶのは、我が早稲田大学図書館の初代館長であった市島春城先生である。周知のように、市島先生は、世界に誇る本学図書館を創設しただけではなく、日本図書館協会を設立して和漢書目録の標準化等を進めて図書館界のために尽力され、また、文人・愛書家館長として図書館に気品をそえて外部の評価を高めるとともに、その蔵書の質量両面の増強に力を振るわれた。

このような館長の理想像を前にすると、総長より図書館長への就任を仰せつかった時に、非才の私は、まったくその任に非ずと思った。しかし奥島前総長からは、学生の身になって、利用しやすい図書館のために汗を流してほしいといわれ、図書館長の大任を引き受けることにした。一利用者として図書館に対する希望はあったので、利用者の便宜を図るといふ実際的な面だけならば、なんとかお役に立つこともできるのではないかと考えたからである。

したがって、館長就任時に、「大学構成員の誰でも何処でも何時でも学内の図書資料にアクセスできる環境の整備」という任期中の目標を設定し、この実現に微力を尽くす決意をした。この目標達成の努力の過程でもっとも記憶に残るのは、「図書館利用規則の平準化」である。これはちょうど教職両組合から図書行政に関する全学的な協議の場を設けるようにとの要求があったため、この協議の場の議題に取り上げ、図書行政懇談会（第一次）で検討していただいた。以前の学内の雰囲気を知っている先生方からは各箇所間の連携を図る困難性を指摘され、前途を危惧されもしたが、懇談会に参加された先生方は、W I N E で検索できる図書資料を簡単に閲覧できない不合理性を直ぐに理解してくださり、積極的な答申をいただけた。この結果、各キャンパス図書館の利用規則は統一され、誰でも何処の図書館にでも自由に入館し、図書を閲覧できる体制が整ったのである（その後、西早稲田キャンパスの学生読書室の書誌

データをWINEに一元化する中で、学生読書室を含めて誰でも何処でも利用できる体制は確立した。

このような図書館行政に対する学内各箇所の意識変化を知ること、さらに西早稲田キャンパス各箇所の図書予算が極端な縦割りになっており、箇所間の調整がままならない状態を改善する勇気が沸いた。国内外で増加の一途をたどっているデジタル・データベースや電子ジャーナルへのアクセスを確立するためには、図書館係予算の大学全体における調整が不可避となっており、この改善も焦眉の急の案件であったのである。

図書館係予算の集約の検討のために設置した図書館行政懇談会(第二次)も、本問題について十分な理解をしていた。き、全学の図書館係予算に関して中央図書館に調整役を演じることを認める答申を頂戴することができた。この調整役がうまく機能するかは今後の努力にかかっているが、二回にわたる図書館行政懇談会に示された学内各箇所の協力的な姿勢を見る限り、必ずや成果を挙げることができると確信している。

その他、小生の任期中には、従来からのOCLCとの提携関係を強化するとともに、二〇〇一年度に韓国の高麗大図書館と、また二〇〇二年度にアメリカのコロンビア大学図書館と箇所間協定を結び、海外の学術情報資源へのアクセスの向上にも努めた。学内の図書資料へのバリアフリーなアクセスが曲がりなりにも達成できた現状では、国外の主要な研究図書館との間の交流を促進させ、海外にある文献を自由に入手できる環境を形成することが次の課題となるのではなからうか。

大学図書館は、大学構成員が必要とする教育研究上の情報・資料をそれが何処にあらうと入手できる便宜を与えるサービス機関でなければならぬ。そのためには、私たちの大学図書館自身が内外に向かつて常に「開かれた図書館」を目指すべきであると思っている。

(うらかわ みちたろう 第一六代図書館長)